

No.29 A WORD FROM ANOTHER WORLD



Shady Maple: A Smorgasbord Experience. Karin Strom

Rolling around in my bed, I sleepily reached for my phone to read the time: 5:00am. It was my first morning in America after a grueling 14-hour plane ride. With my sleep schedule in flux, my fiancé and his mother decided to take me to Shady Maple Smorgasbord for breakfast.

I had never been to a proper Smorgasbord, and this experience was nothing small. The large hall was decorated in a country-Victorian style, reminiscent of my aunt's antique treasure home and filled to the brim with obese patrons. After a quick nod and rough guidance from the waitress, we found a table and were given plates. The gastronomic adventure was about to begin. I wandered for at least 10 minutes simply in awe, before I finally reached for a piece of food. People passed by me with plates piled high with donuts, waffles, omelettes, bacon and other breakfast delights. I was content with the eggs, vegetables and sausage collection on my own platter.

Our trio finally sat down to enjoy breakfast and conversation. Throughout our hour of feasting, I noticed the people in the booth across from us get up multiple times to re-fill their plates. It was hard to disregard, as they could barely fit in the booth. I finished my meal with coffee and shoo-fly-pie, an Amish country specialty. This was likely my first and last experience with Shady Maple as I left with a cacophony of feelings: fullness, shame, disgust, amazement, and contentedness.

【ちょっと豆知識】

宮地晶子

スモールガスボードとは、立食式スカンディナビアン料理のこと。日本では帝国ホテルがこの形式を取り入れるとき、北欧のイメージから「バイキング」と名付けました。でも、これだと英語では「海賊」のことになります。一般的には英語ではbuffet style（ビュッフェ）と言います。all-you-can-eat-buffet と言うこともあります。

シェイディー・メープル：※スモールガスボード体験 カリン・ストロム

寝返りを打ちながら、眠気の中、手を伸ばして携帯を見たら、朝の5時。うんざりする14時間のフライトで戻ったアメリカの朝。睡眠サイクルが定まらない私のために、婚約者とその母が朝食にシェイディー・メープル・スモールガスボードに連れていってくれました。

きちんとしたスモールガスボードに行くのは初めてで、なかなかの経験となりました。叔母のアンティークいっばいの家を思わせるカントリービクトリアン風の大ホールは、太りすぎた常連客でいっぱい。ウェイトレスの簡単な説明のあと、席を見つけたら、皿を渡されました。美食の冒険の始まりです。ここで私は畏敬の念に打たれて少なくとも10分間はうろろうしてしまいました。やっと食べ物に手を伸ばしましたが、ドーナツ、ワッフル、オムレツ、ベーコンや、その他朝のごちそうを皿にうずたかく積んだ人々が通りすぎます。私は、といえば、卵、野菜、ソーセージをひと通り取ったら満足です。

3人でご馳走と会話を満喫している間中、向かいの席の人たちが何度もお代わりをするのが目に入ります。席に収まりきれないほどの体型は、ちょっと無視できないものがあります。コーヒーとアーミッシュ自慢のシューフライパイで朝食を締めくくる私の中では、満腹感、羞恥、嫌悪、驚嘆、満足とさまざまな感情が不協和音を奏でていました。たぶん、ここに来るのは最初で最後だな、と思いつつお店を去りました。

(訳：宮地晶子)

英語教育指導員 宮地晶子の

エイゴノマナビカタ

第105回

イングリッシュ・キャンプ

町主催で小学生がイングリッシュ・キャンプを体験した、という記事が新聞に載っていましたね。実は、高校2年生になるうちの息子も、最近イングリッシュ・キャンプに参加し、これはお勧めだなあ、と思っていたところでした。

昨年8月にまず3泊4日のプレ・キャンプがありました。行く前には、申し込んだことを悔やむくらい緊張していた彼ですが、ふたを開ければたいそう楽しかった様子。本番はその5カ月後の今年1月、深川市の北海道立青年の家で4泊5日。学校の宿題を抱

えて、たいそう憂鬱(ゆううつ) そうな顔をしていたのですが、終わってみれば、「性格が変わった気がする」「4泊5日は必要な長さだった」という感想が出ました。英語力のみならず発表力があった気がするそうです。

道内中に友だちもできました。忙しい高校生活、これだけの日数を割くのは大変なことですが、それだけの価値があります。大学の教授や起業家など豪華な講師陣が次々とレクチャーしてくれ、自分たちもディベートやプレゼンテーションをやってみる。ALT(外国語指導助手)や諸外国の留学生がサポートしてくれます。おまけにTOEFL juniorやTOEIC S&Wテストも受けることができます。テストはすべて無料で、結果は後日郵送され、Lexile指数(個人のリーディング能力と文章の難易度を示す指数)が出ます。これはどのレベルの本が自分に合っているかわかる指数で、多読に大助かり。キャンプにかかる費用は、ほとんど深川青年の家の宿泊費と食費くらい。良いことづくめです。

興味を持たれた方は、インターネットなどを利用して「北海道教育委員会スーパーイングリッシュキャンプ」を調べてください。他にも小、中、高校生とさまざまなレベルに対応したキャンプ(年3回)を実施しています。